

2003年9月23日東京渋谷カトリック教会で行われた
ドミニコ会カナダ管区来日七十五周年記念の講演会

修道生活の将来

ミシェル・コテ

2003年9月23日

導入

はじめに、みなさんのすばらしい国へお招きいただいたことだけでなく、修道生活の将来という神秘の世界への洞察をともにさせていただけることについて、感謝の気持ちを心からアリガトウ、アリガトウ、ドウモアリガトウ ゴザイマスと申し上げます。

ご承知のとおり、はっきりとした将来の絵姿をわたしたちに与えることのできる魔法の水晶玉はありません。残念なことに、わたしは、修道生活がどこに向かっているか本当に知りません！誰も修道生活がどこへ向かっているか知らないのですが、わたしは良い仲間の内にいます。まるでわたしたちは暗い夜道を行く車のようです。自分たちのいる道の一部分を照らすライトしかありません。しかし、前にある道が、わたしたちの望む目的地へと、わたしたちを導いてくれることを信じましょう。わたしが確かだと言える唯一のことは、神秘的な方向をわたしたちに示してくれる風があることを感じることができます。この現存こそ、今も、いつも、教会にはたらいている聖霊なのです。

これからお話することについてのわたしの直観はシンプルです。修道者は、幾世紀にもわたって、自らが生きている世界をどのように見るかによって特徴ある生活スタイルを発展させてきたように思われます。これから第一部で一緒に検証したい歴史上の3つの区分は、修道生活が：

- ・ 悲観的世界観から(四世紀)
- ・ あわれみの力強いわざによる克服のひとつへ(中世から第二バチカン公会議まで)

- ・ そして今、主に生活を通して証しすることの必要(現代)

第二部では、これからの修道生活を展望し、わたしたちを待ち構えている世界と、そこでのほたらきのために求められる修道者がどのようなものかを検証し、どうしたら修道者が教会において変わることはない証しする存在たりえるのかを展望します。

修道生活の基礎を築いた時期 一自己へ向かって

教会の始まりにおいて、修道生活は存在しなかったのです。イエスにもパウロにもその意図はありませんでした。初代教会は受け入れられることと尊敬されることが必要でした。教会は核となる家族的価値を強調するパウロの書簡を勧めました。異教徒に対抗するよりはむしろ、福音の真理の範囲内で、この新しい宗教自体に興味を起こさせるべく、彼らに友好的でした。このようにして、キリスト者は大勢になっていきました。

ひとたびコンスタンティヌスが4世紀にキリスト教に自由を与え、帝国に統合すると、教会はまったく新しい存在理由を得ました。宣教する教会から維持する教会となり、統治する教会となったのです。膨大な数の新たな受洗者を治めることにあったのです。彼らが教会の一員となる理由は、迫害時代より高潔には見えませんでした。広く行き渡っていた哲学諸派の強い厭世的立場に見られるように、砂漠の隠遁者や都市の禁欲者は、ラディカルな生活を送ることへのイエスの真の呼びかけだと彼らが考えたことを貫くために、この世からの離脱という対抗文化的な立場を取りました。それは、自立し富んでいる未亡人がしばしば他の未亡人たちを周りに集め、深く個人的な禁欲生活を送りつつ、その財力を用いてあわれみの業を行うことを可能にしました。禁欲とセクシャリティ(当時この言葉はありませんでしたが)は聖性のためのリトマステストとなったのです。

しかし、なぜセクシャリティなのか？なぜ正義、または非暴力、もしくは単純で古き良き時代の愛徳ではないのか？なぜセクシャリティが、三世紀のはじめから五世紀にかけて、聖性のしるしとして突出した位置を占めたのか？イエスは性についてほんの少ししか語っていません。マタイ十九:十二[人から結婚できないようにされた者]や一コリント七:七[パウロいわく、わたしのように独りでいて...]のような節も全体からすると唐突な感じがします。節制や性的禁欲主義の背後にある理由を知るた

めには、時代状況を考えなければなりません。当時は個人の内面や自己へ関心がある時代でした。

時代の雰囲気

まずはじめに、その時代の雰囲気を見てみましょう。三世紀と四世紀は概して悲観的な時期と見られていました。

帝国内での人生はつねに楽ではなかったことを理解しなければなりません。幼児の死亡、日常的な病気の危険と伝染病による死、事故による生涯にわたる怪我、自然災害、飢饉、戦争、そして奴隷状態など、すべてが体の弱さと、なんら決定的安全を与えてくれないこの世の不安定さを際立たせていました。救いは、そこで、個人的な自制をとおして物質世界の外に求めざるを得なかったのです。

当時の多くの哲学体系がその信奉者たちのために真の意味と目的を見つけようと、自身の内に深く入り込むよう誘いました。キリスト者の信仰でさえ、これらすべての体系と戦いながらも、このうちのいくつかの思想にかぶれていたのです。異教徒の主要な哲学的徳目であった禁欲主義(と、それにとまなう貞潔の賞賛)が、修道生活を定義するのに用いられることが常だったのです。キリスト者たちが、自分たちは異教徒たちをイエスにならうよう回心させていると考えていた一方で、異教徒たちの方こそ、実際に、キリスト者たちを超世間かつ徳のある生活形態へと回心させていたのです。

ヒーローとの関係 そして理想的男性・女性との関係

当時の二番目に大きな変化は、ヒーローそして理想的男性もしくは女性に関係していました。聖性の唯一の場は、この世に向かって公けにイエスの「十字架を担う」ことではなく、むしろ、自制をとおして自己を取り扱うという、個人的「十字架」であると考えられたのです。十字架と死は、もはや、他者の手をとおして(イエスの場合がそうであったように)もたらされるものではなく、いまや聖性の個人的探求の一部として選ばれ、自己管理されました。貞潔は次第に結婚よりも望ましい選択となりました。宣教する教会は完全さを目指す教会になったのです。

この生活形態の主なるしは、断食、性的節制、祈り、そして(かろうじて)肉体的に生活するための労働でした。こういった人々は超キリスト者であり、その生活形態をとおして他の誰よりもよくイエスとマリアを模倣することを求めました。彼らはキリスト者共同体の他の人々から賛嘆され、敬愛されました。乙女性を有する神への近しさが、禁欲者たちに物品を提供する者たちの上に祝福と幸運を与えると考えられていました。イエスを通じての神との直接の結びつきが初代教会にはあったのに、今や、信徒たちは、隠世修道者と禁欲的女性が自分たちと神との仲介者になりうると感じていたのです。

時を越えて、修道生活と呼ばれるものは、三つの誓願のかたちをとる公けの立場によって特徴づけられます。その誓願は所有、感情、権力に関する自制の実践方法でした。彼らは他の人たちと一緒にこれを貫くことをいつも選び、創立者によって示された特別な靈性に従う共同体を形づくりました。修道生活こそはキリスト者の唯一の規範となりました。

修道生活 中世から第二ヴァチカン公会議まで:他者へ向かって

隠修士と托鉢者が宣教者に道をゆずり始めたのと同様に、彼らの存在を特徴づけるはたらきは、靈的である道行きになったのです。その結果、修道者による、病院、学校、それに福祉施設は、まことの教会の社会的存在と同義になりました。大きな成功とともに、これらの施設は教会の道具になりました。しかしながら、後にはそれらのはたらきを政府に譲ることで、多くの修道者の共同体がアイデンティティや使命なく残され、その後、数はずいぶんと減っていきました。

ここ百年で修道生活が達した偉業は、世界観と靈的生活形態との協調を成し遂げたことです。それは、使徒的修道共同体をとおして、世に開かれたものへの転換でした。そこには、魂と同様に体においても、他者への関心がありました。それは、その人の人格をとおしての完徳の追求ではなく、他者に与えることをとおしての完徳の追求でした。それは人類家族の必要に配慮することであり、したがって、共通善の発展を考慮することなのです。これが今日、修道生活が社会にあって有する意義あるイメージです。

今日の修道生活 ―この世の中で

二十世紀前半に起こった修道生活の途方もない急増について、わたしたちの見解を特徴づけるために、いくつかの統計を紹介いたします。統計はカナダからのものですが、カトリックが多数もしくは重要な少数を形成している国々にも当てはまります。1970年には、先に述べたとおり、65,000人の修道女・修道士がカナダにいました。2000年には2,5000人、2020年には、6,500人すなわちたった50年間で、その数は(十分の一!)に減り、平均年齢は78.5歳になります。ということは、たった数年後、あるいは次の10年間のうちに、カナダの修道生活は、お父さんの世代ではなく、おじいさんの世代でもなく、ひいおじいさんの世代によって担われることになるのです! 一体、修道生活に未来はあるのでしょうか? もちろん、あります。わたしは心配しているのでしょうか? いいえ、何があるとも! そして、たとえ、今日、南北アメリカにおよそ285,000人の修道者(ラテンアメリカに15万人、USAにおよそ11万人、そしてカナダに現在およそ2万3千人)がいると見積もっても、それは数の問題ではないのです。

しかし、将来は修道生活に変化を要求するでしょう。修道者はいまや、新しい発展に応えるべく、その負担と施設を振り捨て、身軽なうさぎのようにならなければなりません。今日、共同体は修道生活の他の新しいかたちへと移行し、道行きを探らなければならないのです。いくつかの状況は、活性化され、チャレンジに直面しなければなりません。関わるグループには、自分たちが霊的に生まれた「箱の外で考える」ことが必要になります。以上が過去と現在から学ぶことのできることです。聖性はもはや、排他的で個人的なものでも、個々人への行動に見出されるだけのものでもないのです。

明日の修道生活

最後のパートでは、まず今日世界が提示しているチャレンジの様子を示し、それから、新しい必要に応えるであろう修道士・修道女のあり方について述べたいと思います。

どんな世界が待ち構えているか?

わたしたちは変化の世界に直面しています。その変化があまりに速くて、次の発明が何をもたらすかという推測を誰も期待しないほどです。新しい移動と通信の技術が、グローバルゼイションとして

知られることを、そして、それとともに、国家と大陸のみならず惑星そのものを建設し破壊する、全く新しい方法を造り出しています。

安全と雇用を理由とした、人々の大規模な移動は巨大な人口蓄積を生み、そこでは民族グループと宗教がより合わされ、文化は豊かになると同時にしかし、互いに対立し排除しあいます。ヨーロッパはもはや中心ではありません。かわりに、中心は新しいアメリカ的な文化のるつぼ、それは、政治・金融システムばかりでなく、服飾と芸能(映画とテレビ)、広告とメディア、その他をとおしてグローバルな支配を敷こうと努めています。あらゆるレベルで、支配的文化が、誰が内で誰が外かを決めているのです。そして、パラメーターを管理するのは経済エリートであり、彼らは人類の建築家として政治家と社会学者に取って代わり、自分たちのイメージのままに世界を造っています。この惑星を守ること、もしくは総合的な人間の発展を育てることに対立するようになるでしょう。

ネオリベラルな思考様式に反対するために、不安定だが効果的な市民社会が現れつつあります。それは市民たちのグループ(草の根かつ非政府の組織、組合、特定の関心についてのグループ、フェミニスト運動、その他)から成っています。これらのグループは、グローバリゼーションによる被害を立証しており、地域、世代、関連する領域間の相互依存の概念と、彼らが共有物とみなすまさにこの惑星の未来を、育成しようと努めています。根本において死に等しいような組織的問題を特定し分析するため、彼らは組織されています。もはや、単に苦痛を軽減するという問題ではなく、正しくないもの、誤っているものを作り替え、取り替えるという問題なのです。愛徳はもはや充分ではありません。人々は、政治的になること、すべてについての正義のシステムを造ることを必要としているのです。

グローバリゼーションのこの両義的な世界に直面して、修道者は権力システムの幻影——特に、教会の内側と外側で、父権制によって敷かれた昔ながらの依存システム——を暴くよう呼ばれています。消費依存から脱却し、排除された人々の側につき、現状への抵抗を促進する生活形態をとおし、共同体において流れを変える生き方をしよう呼ばれています。修道者は、非人間化の組織的原因究明の働きかけによって、最大可能な数の人々の真の解放を含んだヴィジョンを示すことができます。そのゴールは、相互に結ばれた非暴力の世界の中で、グローバルな連帯を育てること

でしょう。教皇ヨハネ・パウロ2世が言っているように、死のグローバリゼーションには反対しなければなりません、そして、よりいっそう良いことは、連帯のグローバリゼーションを提示することです。

このはたらきのためにどんな修道者が求められるか？

次に、わたしが修道生活の本質、基盤、譲れないと考えていることを、お話ししたいと思います。

- ・ 人生で究極的かつ唯一の必要な現実としての、神の根本的探求
- ・ 被造物と全人類、特に見捨てられた人々を思う神のご計画に、預言的に協力する意志
- ・ 世界への福音宣教を目的として、(与えられた共同体)教会において自覚された賜物(カリスマもしくは神から与えられたタレント)に生きる望み
- ・ 終生・有期誓願を通して、公式に広く開かれた方法で、共同体において、この委託を生き抜くこと

修道生活は、共同体のかたちをとる、神の普遍的な探求です。それは、奉仕と宣教をとおして教会と世界に仕えるように、そのグループの際立った霊性への広く開かれたかかわりを通じてなされるのです。神を探求する公けに認識された共同体として、メンバーは、深い観想から高度な社会参加まで、諸形式の全範囲をカバーすることになります。ある者は直接的な祈りによって神を愛することに時間をかけ、そして、シエナのカタリナのように、同胞である市民への関わりへ向き直るでしょう。またある者は隣人を愛し正義を求めることに第一に時間をかけ、祈りのうちに神を求めることの必要を発見するでしょう。すべては神の賜物なのです。修道者はその使命において信徒からの挑戦を必要とするものです。

修道者のあかし:教会における不変の存在？

この最後のパートでは1)どんな世界が待ち構えているか、2)何が修道者を定義づけるか、を見てきました。さあ、最後の問いです。わたしたちはそれではどのようになるべく呼ばれているのでしょうか。

はじめに申し上げたように、わたしは本当に知りません。修道生活が進むべき領域の予兆のい
くらかでも示せたことを願います。それでも、五つの予兆、道筋を示すことができます。

- 神の与えて下さった共同体の現存(預言的カリスマ)を本質的にするものを際立たせることに
よって。
- 新しいプロジェクトを引き受けるために、それぞれの人格のうちにある生きた力を解放する
ことによって。活動への2層のアプローチが必要になるでしょう、ひとつはうさぎのため、もう
ひとつは恐竜のため。
- 多文化・多信仰の世界に打ち立てられるべき新しい協働と連帯を検証することによって。
神は様々な信仰を持つ同胞[そして信仰を持たない人たち]のあいだで、つねに世にはた
らいておられます。知られていない人々、飼いならされていない人々の中に神の現存を見
出すように招かれた場面に、修道者が現れる以前にできえ。この前の千年紀は修道者のも
のでしたが、次の千年紀は信徒のものでしょう。
- 声なき人々を選びそしてともにあることによって。イエスがガリラヤの道でわたしたちに示し
て下さったように、彼らの視角をとおして世界を見るためです。修道者は貧しい人々のため
に危険を冒すゆとりを持っています。預言的・転倒的であることができ、イエスのごとき源に
立ち返るすべてと行動をともにすることができるのです。
- 消費主義と物質主義の世界で、質素さ(自己抑制)のしるしとなり、より単純な生き方を選ぶ
ことによって。「もしひとつの部分が傷つけば全体が傷つく」(一コリント十二:二十六)という
事実を認識し、修道者は、ネオリベラルな「自由」市場経済の実践によって生み出された排
除に、心から抵抗します。それが、連帯の価値をおとしめ、調和のとれた世界(cosmos)とい
う賜物を唯一功利性の観点からしか見ず、わたしたちの限りある星の破壊を急がせるので、
それを拒むのです。経済とエコロジーはもはや宗教と分かれていません。そのうえ、それら

はわたしたちの信仰において同等になっています。

結び

わたしたちはこのすべてを見て、この世界のための神の夢の実現のために、本当に成功、もしくはなんとかやっていくことができるのでしょうか？ 思い出さなければなりません、わたしたちが神の道具であること、わたしたち自身が神ではないことを！

このすべてを整理してくれるひとつの話をもって結ぼうと思います。これは、カナダのヴァンクーヴァーでの仏教者・キリスト者対話に出席した友人から聞いた話です。グループは社会参加について話し合っていて、あるキリスト者が仏教者たちの参加が不十分だと批判しました。ひとりの仏教者がそのキリスト者に応えて言いました。「鳩のようなのです... (沈黙)」キリスト者はそこでたずねました。「鳩のようです、とはどういう意味ですか？」そして、その仏教者は応えました。「昔、森のうえを飛んでいる鳩がいて、火事を見つけました。鳩は自分に何ができるだろうと迷いました。それから、小川へ下りて行って、水を背中に乗せ、またくちばしの中に入れ、火事のところへ行き、水のしずくを火にかけました。」再び、長い沈黙がありました。「そして、それから？」とキリスト者がたずねました。仏教者が応えました。「鳩は鳩にできることをします...」

わたしたちは神の鳩です。わたしたちは、わたしたちにできることをするだけです。しかし、おそらく、わたしたちが 50,000 羽の鳩を集めることができれば、火事を消すことができるでしょう...

皆さんのこれからはたらきに祝福がありますように！

ミシェル・コテ

2003 年 9 月 23 日